２０１５年

東洋大学審査学位論文の要約

井上円了の研究

三浦節夫

要約

一　長岡時代

円了は安政五（一八五八）年に生まれた。この年の七月に日米修好通商条約が調印されている。一〇月には「安政の大獄」が始まった。時代は幕末から明治維新へと激動する過程に入っていた。円了の生誕地は長岡藩西組の浦村であり、生家は東本願寺の末寺の慈光寺であり、真宗寺院の長男として生まれたという歴史的地理的条件があった。円了は住職の後継者として育てられた。

円了の生涯と思想を考える時、長岡時代は人格形成の時期であった。円了の生涯の基本には、真宗寺院の長男に生まれたことがある。仏教者として育てられたのである。また、寺院の後継者は、浦村という地域社会の社会的文化的な指導者になることを期待されていた。円了は生まれつき指導者意識を持つように育てられたのである。[1]

つぎに大きな条件であったのは、これまでの井上円了研究でほとんど注目されることがなかったが、檀家総代としての高橋家の存在である。円了の育った時は九代目の高橋九郎右衛門が高橋家の当主だった。その後、明治初期に高橋家を継承したのは一〇代目の高橋九郎で、円了より九歳年上であった（高橋九郎は石黒忠悳と浦村の隣村の片貝村の耕読堂という塾で学んだ仲間であった）。一二代目の当主・高橋健吉によれば、同家の古文書の中に、嘉永六年にアメリカのペリーが浦賀に来航したという記述があったという。高橋家は新潟県を代表する進歩的地主の一つであったが、同時に「骨接ぎ薬」を江戸や京都の各地まで販売していた家でもある。

幕末の歴史的変動の情報は、薬の販売を通して集められ、その情報は菩提寺である慈光寺にも伝えられたと考えられる。円了が時代に対し鋭敏に反応する感覚を持つようになったのは、住職の父や坊守の母の思想もあるが、高橋家の存在が大きく作用したと思われる。また円了が明治維新の年の前半から石黒忠悳の塾に通い、その後、慈光寺で藩の儒者・木村鈍叟から高いレベルの漢学教育を受け（木村鈍叟は高橋家と親交があった）、さらに長岡の洋学校で学べた背景には、慈光寺を総代として経済的社会的に支えた高橋家の存在があったと考えられる。[2]

円了は慈光寺における父母による宗門教育を受けた後で、慶応四年四月から明治二年四月まで、すなわち明治維新の年に一年間にわたり石黒忠悳の塾に学んだ。石黒塾は隣村の片貝村にあった。一〇歳になった円了は一時間かけて通った。

教師の石黒忠悳は、蘭癖と称された佐久間象山の教戒を受けて、攘夷思想を捨て、勤皇・開化思想へ変わり、それにともなって武士を捨

てて蘭方医に翻身した人物であった。当時、二三歳で江戸の医学所（後の東京大学医学部となる）で助教を勤めた有能な人間でもあった。「先生は、洋風を好み」と円了はいう。円了の世界体験、思想体験の始まりであった。誰も通わぬ大雪の日も、下駄の鼻緒が切れて裸足で行かざるを得ないときも、円了は石黒忠悳先生の塾へ学びに行った。ものに憑かれたように、石黒の存在と思想に魅了され、それに夢中になれるという円了の性格は、このときから発揮された。漢学と算数の初歩を習ったが、それ以上の知的な目覚めを、円了は体験したのである。塾は石黒の都合により一年間で終わったが、この明治維新のとき、長岡藩では戊申戦争、佐渡では廃仏毀釈という歴史的事件があったが、石黒塾での体験は、円了の明治維新の意味をもち、円了の生涯と思想の出発点ともなった。

明治二年から明治五年まで、円了は長岡藩を代表する儒学者である木村鈍叟から本格的に漢学を修学した。木村は戊申戦争で焦土となった長岡から浦村の慈光寺の前に移住してきていた。寺を会場とし「慈光黌」と円了が名付けたこの塾では二〇人以上が学んでいた。四年間にわたる木村の漢学教育は藩校レベルの講義であり、最後には討議まで行う長岡藩校の伝統に則った内容であったから、円了はここで初めて思想の体系的基礎を身に付けたのである。これがのちに、西洋思想を受容する基盤となった。慈光黌では、午前は漢学、午後は英語が学ばれた（長岡藩における英語教育は、庄内藩との連携により、藩時代から進められていたという研究が現在、行われている）。また円了はこの頃から、漢書以外に、明治の文明開化に導く啓蒙思想の書籍を読書している。福沢諭吉の『西洋事情』が読書歴に含まれている。変化する時代の精神に関心を寄せていたのである。

明治四年に、一三歳で円了は得度している。この時から「釈円了」という法名を名乗る。晩年、円了は得度のことを、自分の意思ではなく、住職の父が同意を得ずに行ったことであると語っている。父との不和があったのである。真宗の慣例によれば、開祖の親鸞が九歳で得度したことに従って、各寺の子弟も得度することになっている。数年遅れたのは円了の意思に沿わなかったからであろう。二九歳のときに出版した『仏教活論序論』の自伝的文章によれば、円了は仏教を「誹謗排斥すること少しも常人の見るところに異ならず」、ひそかに「顱を円にし珠を手にして世人と相対するは一身の恥辱と思い」をなしていたと述べている。清水乞は、円了のこの記述は後年のことで真宗の生活に従順に従っていたというが、田村晃祐はいわゆる葬式仏教を嫌っていたと捉えている。はやり少年円了は僧侶という特殊な職業に違和感を覚えていたと考えられる。武士から西洋医に翻身した石黒忠悳を見ていた影響もあっただろう。円了は自分の将来の可能性を探していたのではないだろうか。

明治五年一一月、長岡洋学校が創立された。明治という新時代に相応しい人材を育成しようとした学校である。しかし、新潟県の方針により県下の洋学校は強制的に新潟学校に統一される。地元の反発もあったであろう。洋学校は一年後に「新潟学校第一分校」に改称される。そのためか、通常三〇人以上が入学したのであるが、円了が入学した明治七年の入学生は一三人と少なかった。もともと洋学校には資格制限があった。武士の子弟以外は認められなかったのである。円了のときは人数の少なさによって、その制限が緩和されたのだろう。円了にとって洋学校への進学は希望したことであった。両親の許可を得たのである（村上専精は志をもって苦学し、一八歳から漢学を、二一歳から仏教を学んでいる。一六歳になった円了にとって仏教を学ぶことは修練と思われるが、円了は漢学から洋学へと転換している。両親はどのように考えていたのであろうか）。

洋学校は洋学と数学を二年間にわたり教育するところであった。すでに高山楽群社で英語の初歩を学んでいた円了は、すぐにパーレーの万国史の教室に入り、英書で世界史、欧米各国の歴史、世界の文明史、世界の地理、理科、数学の学習へと進んだ。戸惑いはあったが、円了は深夜まで洋書を読み込むなど、必死で対応している。傍らで、福沢諭吉、中村正直などのいわゆる開化思想・啓蒙思想を読書している。寺を離れた寄宿舎生活は生徒同士で自由で楽しい生活の様子が記されている。当時の円了の漢詩を読むと、人間は同等の権利を有すること、日本は文明開化に進み、長岡の文明も開化していること、世界は文明が進み国際化されていることなどが詠み込まれている。この時期に、キリスト教の聖書を漢訳と英訳相対で読んでおり、初めて外国の宗教にも触れている。このようにして、円了の思想は開化を続けていた。終業後、円了は学校の「受業生」（助教）に採用されている。優秀であったからであろう。後身の長岡学校の開講式で祝詞を述べた円了は、その記録の最後に「今ヤ我日本ハ復往時ノ日本ニアラザルナリ」と書いている。積極的に新時代へと進もうと円了の精神は、「和同会」という有志の団体を結成し、自己の思想を演説する稽古を行うまでに発展している。

これまでの井上円了研究では、長岡洋学校に学んだという単純な履歴しか分からなかった。現在では、生活と思想の内実まで解明することができるようになった。長岡学校の助教として働いていた円了は、自らの将来をどのように描いていたのであろうか。慈光寺の年間の法要儀式には出席していたから、僧侶としての自覚はあったはずである。次期住職としての周囲の期待を肌で感じていた。しかし、日本の文明開化の時代に、自ら果たすべき役割の自覚もあった。洋学校で時代に相応しい人材の育成に携わる教育者の道に進んでいたから、円了は自己の将来について、慈光寺と洋学校との間に矛盾を感じながら苦悩し

ていたのではないだろうか。

二　東京大学時代

長岡の洋学校で助教を勤めていた円了のもとへ、第一の転機が訪れたのは、明治一〇年六月のことであった。慈光寺の本山である京都の東本願寺から、僧侶円了に対して「至急上洛せよ」との命令があったからである。真宗大谷派（東本願寺）では、大教院分離運動を経て、新たな教化体制の構築を目指していた。その中核となる政策が文明開化の新国家・社会に対応する新しい教育体制（真宗大谷派では、学事と呼んでいる）の確立であった。全国各地に小教校・中教校・大教校という学校体制を新設することであり（明治五年の日本の「学制」と同じ意味をもつ）、そのための教員養成にまず着手して、一万か寺の中の優秀な子弟を本山に集めて英才教育を施そうとし、教師教校と育英教校を新設していた。円了は新たに設置された教師教校英学科に招集された五人の一人であった。

このようにして、円了の京都生活は始まった。本山の学校での生活を、円了はどのように感じていたのだろうか。筆者は同教団の教理学者が「本山は別世界であり、本山にいると、世界はここを中心に回っている」と述べていることを聞いたことがある。筆者もその発言に同感したが、円了の京都時代の漢詩をみると、長岡時代の詩題であった文明開化、日本と世界などの新時代を意識したことがまったく見られないのである。結局、円了は英才を認められて、半年後の明治一一年三月に、東本願寺の東京留学生となり、第二の転機を迎える。そのときの留別という題の漢詩で、円了はつぎのように詠んでいる。[3]

曉煙春雨暗風塵　　曉煙　春雨　風塵暗く
駅路青青柳色新　　駅路青青として柳色新たなり
半歳濯纓鴨川水　　半歳纓（えい）を鴨川の水に濯（すす）ぎ
弾冠又向墨江浜　　弾冠して又た墨江の浜に向かう

朝もやに降る春雨で暗い中を、旅路の雨に濡れた柳は青々としていた。半年のあいだ鴨川のほとりで俗世間を離れていたが、学問の用意を整えて隅田川のほとりに向かうのだ。

このように、円了は京都時代が俗世間を離れていたことであったと述べている。そして、これから東京で学問をするのであると詠っている。明治一〇年に創立された東京大学への入学を目指していたからである。

四月八日に、円了は東京に着いた。京都から神戸、神戸から横浜、

横浜から東京へというこの旅行で、円了は蒸気機関車、蒸気船という日本の文明開化を象徴するものを体験し、また東京に着いてほどなく東京大学初代総理の加藤弘之という近代日本学界のリーダーの知遇を得た。中野目徹がいう「書生社会」[4]に入ったのである。

創立されたばかりの東京大学は予備門と四つの学部で構成されていた。円了の東京大学に関する第一印象は、「日本の大学」ではなく「西洋の大学」であるということであった。多くの教員はお雇い外国人であり、学生の会話や学生への掲示もすべて英語という徹底した学校であった。九月に入学試験があった。円了の英語は長岡時代の変則流であったから、ネーティブの試験官の発音は分からなかった。しかし、数学が満点であったから、平均で六〇点に達して合格し、予備門の第二年級へ編入できた。予備門は英語、数学、国語を中心にした基礎教育を徹底して、学部へ進学させる者を選択するところであった。そのため、学年毎に退学や留年する生徒は少なくなかった。同級生の話によれば、円了はクラスで首席を争う成績であったから、無事に進級して、明治一四年に文学部哲学科のただ一人の入学生となった（進学は四つの学部の学生総数は四八名という狭き門であった）。

大学生となった円了は、専門の哲学について、始めに論理学、つぎに西洋哲学史（哲学論）、さらに心理学、最後に倫理学を教授された。教員はフェノロサと外山正一が中心であった。哲学科では西洋哲学ばかりではなく、中国哲学、印度哲学という東洋哲学も教授された。円了は大学一年生（二三歳）から論文を執筆し、『開導新聞』（真宗大谷派が刊行した仏教系の隔日刊の新聞）や創刊されたばかりの『東洋学芸雑誌』に発表している。これまでの井上円了研究では、『真理金針』からを初期思想と捉えているが、一年生の「主客問答」という論文では、キリスト教、仏教、哲学という円了の初期思想の基本テーマ、あるいは中国哲学の問題が論じられている。このことから考えて、大学時代の論文は初期思想の基礎として看過すべきものではないと言える。

円了が大学時代に学んだことは、各学年のカリキュラムから判明しているが、その他、円了が自ら研究した内容は、「明治一六年秋　文三年生　稿録」という英書からの抜き書きノートから判明している。ライナ・シュルツァの『稿録』の研究によれば、五九冊の洋書を対象とし、当時の東京大学図書館の分類記号によれば、哲学が四四冊、生物学・人間学が三冊、地理学が二冊、物理学が二冊、辞典・百科事典が二冊、化学が一冊、歴史が一冊、文学が一冊となっている。この抜書き以外に、この『稿録』には図書目録が写されており、その後の研究の用意もなされていたと考えられる。清水乞の『稿録』に関する研究では、この抜書きが後の著書や論文の基礎知識となっていることが証明されている。この『稿録』の存在は、円了の学問の出発点が西洋の学問であったことを物語っている。

それから一年後の明治一七年秋（文学部四年生）に、東本願寺へ提出した上申書をみると、これらの研究から導き出されたことが、つぎのように述べられている。

第一に、西洋哲学の諸科を研究して、仏教の諸説との応合を明らかにすること（西洋哲学の数百年来にわたり研究するところの真理は、仏一代の所説に外ならず。西洋諸学の今日において論決するところの諸説は、ことごとく千年以前の釈尊の活眼卓説によるものであり、そのため、東洋古学を再興すること）。

第二に、物理学・生物学を講習して、仏説と理学との争論を調和すること。

第三に、耶蘇教の極理を論破して、仏教の真理を開示すること。

第四に、政治・道徳の性質、社会の事情を捜索して、実際の布教を思考すること。

円了は大学時代の学究生活を通して、これらの問題に関する解決方法を見出していたと考えられる。そのことは、同じ明治一七年一〇月から一大論文が発表されたからである。第一論文「耶蘇教を排するは理論にあるか」は明治一七年一〇月から明治一八年九月まで、第二論文「耶蘇教を排するは実際にあるか」は明治一九年一月から明治一九年七月まで、第三論文「仏教は知力情感両全の宗教なるゆえんを論ず」は明治一九年七月から明治一九年一一月まで、円了は三つの論文を仏教系新聞『明教新誌』に連載している。

すでに本論で詳細に述べたように、この三つの論文は、新聞の読者を対象としているので、繰り返しの多さや論理展開に明確さを欠くなどの欠点はあるが、円了が上申書で目的としていたことはこの第一論文から第三論文で論証されていると言ってよいであろう。そして、この三つの論文に対する反響があって、第一論文は『破邪新論』と『真理金針　初編』、第二論文は『真理金針　続編』、第三論文は『真理金針　続々編』として単行本として再度刊行され、円了の出世作の一つとなった。

また、円了は哲学の論文として「哲学要領」を明治一七年四月から明治一九年八月まで、仏教系の月刊誌『令知会雑誌』に連載している。この論文は日本人の手による初めての西洋哲学史であったから、のちに『哲学要領　前編』として、こちらも再刊されている。

これに続いて、円了は初期の著作活動を活発に展開して、当時の日本人に近代の西洋の学問を紹介し、また宗教問題への提起を行って、若き論客としての社会的地位を確立した。哲学の分野では、『哲学一夕話』全三編を出版して、西洋哲学に対する新たな哲学論（形而上学の理論）を提起した。『哲学要領　後編』は円了の哲学論でもある。仏教の分野では、『仏教活論序論』を刊行した。これは『真理金針』の結論を分かりやすくまとめながら、護国愛理という円了の理念を表明し

た画期的な単行本であった。『仏教活論本論　第一編　破邪活論』は『真理金針　初編』と異なり論理的に再整理したものである。心理学の分野では、『通信教授　心理学』、『心理摘要』が刊行され、西洋の心理学説の初めての解説書であった。倫理学の分野では、『倫理通論　第一』、『倫理通論　第二』が刊行されている。以上の円了の著作は一冊を除いて、すべて明治二〇年までに刊行されている。このような旺盛な執筆活動は、円了の身体を蝕み、やがて喀血に至り、療養を余儀なくされたのであるが、円了は哲学思想の普及・伝道、仏教再興の活動を諦めず、自己の信念を貫いたのであった。

この時代の円了の思想について、まとめておこう。

第一に、円了は東本願寺（真宗大谷派）の給費生であったが、田村晃祐が「円了はすでに真宗の枠を出て、仏教と西洋哲学の真理性に心を向け、また日本仏教全体の衰退に心を痛めており、したがって日本仏教全体の興隆に関心をもっておりました」[5]と述べているように、円了は大学初期の論文と大学後期のそれを比較すれば、初期は結論に真宗への期待が述べられていたが、後期の第一論文からは仏教というより発展した視野から論じられるようになっている。

第二は、円了は大学時代の学習と研究により、近代西洋の哲学から理学までの学問体系を吸収し、それらが真理を追究するものであることを確信した。そのため、円了の近代化とは西洋の学問の体系に合致するか否かを基準としたものであった。このような近代の知こそ、日本が目指すべき愛理の精神であり、円了が『仏教活論序論』で、自己の理念を護国愛理と定めたのも、このような思想からであった。

第三に、円了は西洋哲学に真理性を、自己の発見であるとして認めた。その西洋哲学が追究した真理は、旧来の諸教の儒教にもなく、新しい宗教のキリスト教にもなく、独り仏教のみに存することを発見した。森章司はこの発見の体験を回心（コンバージョン）と呼んでいる。このことから、円了は真理である仏教（日本の伝統的な文化）を再興しようと決断した。この第二と第三は、円了の著述活動の原点であった。[6]

第四は、これまでの諸点を総合して、円了はつぎのように考えた。日本の国家・社会を近代化＝国際化するためには、文化の根からの見直しが必要であり、そのために、哲学の理性的認識を広め、仏教界や教育界に新しい近代の知をもった人材を育成することが急務であるとし、私立学校の創立を念願とした。そのため、大学を首席で卒業したにも拘わらず、石黒忠悳からの文部省という官途への斡旋も断り、また東本願寺の教師教校へ戻ることも断った。すでに大学四年生の初めに東本願寺への上申書を提出し、学校創立のことを検討するように依頼していたので、円了は本山との交渉を再三再四にわたり行うこととなった。

長岡時代の円了は日本の文明開化の担い手になることが夢であった。縁あって東京大学に学んだ円了は、西洋の学問を吸収し、日本の近代化は西洋の長所を摂取し、日本の長所（国粋）を発展させることにあると自覚し、日本の近代化の先駆者となった。その先駆者としての道は、すでに述べたように大病を患うなどと、決して平坦なものではなかったが、円了は護国愛理の精神で、日本の近代化を進めようとしていた。

三　哲学館時代

円了が日本の近代化のために、大学卒業後に最初に取り組んだことは、著作による新たな知の提起と普及であった。護国愛理の理念からすれば、理論と実際の両面から近代化に取り組む必要があり、著作は理論であり、学校における教育は実際であった。官途に就くことを断った円了には、在野で教育活動を行い、近代の知を身につけた新たな人材の養成こそ急務であった。卒業から二年後の明治二〇年六月、まだ病気療養中であったが、円了は決断して、私立学校・哲学館の創立へと進む。「哲学館開設ノ旨趣」を新聞・雑誌に発表したのである。

哲学館のモデルは当時の帝国大学哲学科であり、その建学の精神の一つは「余資なき者」「優暇なき者」に教育の機会を開放することにあり、日本語で教育を行うことであった。学生募集と講師陣の編成が行われ、寺の一室を教場として九月一六日に開館した。定員五〇名の予定であったが、入学生は予想外に多く、一三〇名にまで達した。また、円了は自己の経験を活かして、文科系で初めての通信教育にも着手した。館外員と呼ばれた通信教育生は、北は北海道から南は沖縄までと広範囲にわたり、総員一八三一名に及び、円了は全国的な教育体制の確立に成功した。

創立の事業を終えた円了は、明治二一年六月に第一回の世界旅行に出発した。欧米の先進諸国における宗教と教育の視察が目的であった。一年間に及んだこの世界旅行によって、円了は新たな知見を得た。明治二二年六月に帰国した円了は早速、「哲学館改良ノ目的ニ関シテ意見」を発表した。その中で、宇宙主義と日本主義を掲げ、教育における普遍性の確立と実際における近代化の推進を目的とし、日本固有の学問の振興、東洋学研究の隆盛、徳育（人間性）の重視を掲げ、「日本主義の大学の設立」を目標とし、具体的に哲学教育による近代の知に立脚した宗教家と教育家の養成を目指すことを明らかにした。[7]「哲学館の独立」として、八月から新校舎の建設に着工した。しかし、完成目前の九月一一日に新校舎は台風のために倒壊し、円了は大きな決断を迫られた。二〇日に再建工事が開始された。一一月一三日、哲学館移転式が行われ、円了は危機を乗り越えた。その間にあって、円了を

物心両面から支援したのは勝海舟であった。ところが、円了が風災と呼んだこの災害によって、哲学館は大きな負債を抱えることになった。知人や有志による寄付で創立された哲学館は経営危機に直面したが、円了は海舟と相談して、国民的寄付を求める方向に転換し、明治二三年一一月、第一回の全国巡講に出発した。海舟の支援もあって、この巡講は進み、円了は四年間かけて北から南までの全国各地を一周した。これによって、多額の負債を解消することができた。この巡講によって、円了は日本社会の実態をつぶさに知ることができたし、哲学館の館主という教育事業家としての責任を改めて自覚することとなった。

しかし、哲学館の平穏な日々は長続きしなかった。明治二九年の年初に、円了は大学設立の階梯として専門科の設立を表明し、新たな募金は海舟の支援もあって、順調に進んだが、一二月一三日に類焼から校舎と寄宿舎を全焼するという災害に遭遇した。円了は再度、決断に迫られた。すでに新たな校地は購入されていたので、翌明治三〇年四月に新校舎の建設に着手し、七月に完成して、九月に始業式が行われた。この前の八月に宮内庁から哲学館に三〇〇円が下賜された。円了はこれを基金に中学校の設立に取り組んだのである。円了は第二回の全国巡講による募金に着手した。今回から各県下を一巡する方法に転換した。

明治三二年七月、文部省より哲学館に対して、中等教員無試験検定校の認可があった。それまで官学に許されていた資格を、私学に開放した初めての認可であり、この認可を得るために、円了は私学各校と協力し、その運動のリーダーとなって、文部省へ建議していた。特典とよばれたこの資格を得て、円了は教育事業家として新たな構想を描いた。ところが、明治三五年一〇月に行われた無試験検定の第一回の卒業試験において、文部省の視学官が倫理学の学生の解答を問題視して、結局、一二月一三日に哲学館の無試験検定校の認可が取り消された。明治の二大思想事件といわれる哲学館事件の発生である。この取り消しがあったとき、円了は第二回の世界旅行でインドに滞在していた。館主代理は倫理学の担当者であった中島徳蔵である。中島は翌明治三六年一月に新聞に寄稿して、文部省による哲学館への処分の不当性を社会へ訴えた。各新聞・雑誌によって文部省への批判は高まり、哲学館事件は内外に影響を及ぼす一大社会問題に発展した。

円了はイギリスのロンドンで事件の発生を知った。早速、知人の文部省関係者に会って、事件の真相を聞き出した。文部省は威信にかけて再認可をすぐに行わないだろうという結論であった。円了は苦悩しながら、哲学館の新しい進路を決断した。それは哲学館を「独立自活の精神で純然たる私立学校」とするものであった。明治三六年七月、円了は帰国した。九月に「広く同窓諸子に告ぐ」を発表して、新しい哲学館の方針を明らかにした。一〇月、すでに公布されていた専門学

校令により哲学館は哲学館大学として認可された。円了は日露戦争勃発後の日本において、哲学館事件の影響を受けた哲学館大学の再建に取り組んだ。教育事業家として円了が描いてきた構想は再検討を余儀なくされた。その渦中の明治三七年一〇月に、哲学館大学の関係者という内部から無試験検定再認可の建議書や勧告書が出されるようになった。個人で哲学館を経営してきた円了は再認可を申請しない方針であったから、大学内部で路線の対立が露わになったのである。

円了は学内対立の兆しを感じていた明治三七年夏から、神経衰弱症に罹るようになっていた。病状は一進一退の状況であったが、明治三八年一二月には庭前で卒倒しかけるという深刻な状態に陥った。これらの苦悩の日々を、円了は「退隠の暗潮」と呼んでいたが、結局、一三日に大学や学校から引退を決意した。翌明治三九年一月(四八歳)に哲学館からの引退を表明し、財団法人組織に変更し、東洋大学と改称して、再スタートさせて、円了の哲学館時代はこうして終わったのである。

すでにみたように、円了の哲学館時代は風災、火災、人災と困難な過程を進まなければならなかった。このことは、学者としての円了の活動に大きな影響を与えるものであった。

第一に、円了の初期著作と称される『仏教活論』は、『序論』が明治二〇年二月、『破邪活論』が明治二〇年一二月と、哲学館の創立前後に刊行されたが、『顕正活論』は明治二三年九月と刊行予告から大幅に遅れた。その原因は創立直後の活動に専念せざるを得なかったからである。『顕正活論』は円了の哲学論と仏教論を提起したものであるが、総論のみで論文は終わり、その先の各宗論が欠如しているという問題が残った。すでに哲学館には多額の負債が残り、この問題に対応しなければならなかったが、第一回の全国巡講に出かける前の夏休みに執筆したので、十分な時間が取れなかったのであろう。

しかし、円了の研究は多忙な日々においても行われたようである。明治二五年五月に『真宗哲学序論』、明治二六年六月に『禅宗哲学序論』、明治二八年三月に『日宗哲学序論』という鎌倉仏教を取り上げた各論が刊行されている。このような円了の仏教研究について、仏教学者の田村晃祐はつぎのようにのべている。[8]

また、〔円了〕の研究の学問的であり全体的、統一的な性格をもつことは、村上専精の『仏教統一論』(明治三四年)や斎藤唯信の『仏教学概論』(明治四〇年)にさきだつ井上円了の『真宗哲学序論』(明治二五年)にすでにあらわれているのであり、明治維新後の近代日本における、新しい学問としての仏教研究の地平を開く努力の大きな一つのあらわれとして再評価し、近代仏教学研究史の中に位置付けていく試みがなされなければならないものと思われる。

田村の問題提起については、今後見直しが進められるであろう。

第二に、円了は第一回の全国巡講の際に、各地で妖怪に関する聞き取り調査を実施している。その成果はそれまでの文献研究、各地から報告と合わせて、明治二六年一一月から『哲学館講義録第七学年度妖怪学』として、明治二七年一〇月まで刊行された。明治二九年には『妖怪学講義』として六冊に合本されて刊行され、さらに『妖怪学雑誌』としても再刊されている。当時の日本の民衆は島国的で西洋や世界のことを知らず、迷信にとりつかれるなど、その生活は科学的合理性に欠け、小社会の経験の枠内で生活する人々であった。政府はこのような民衆に対して改善の手をさしのべることなく、近代化を急ぐあまり、民衆を放置し、切り捨てる方針に終始していた。その中で、円了は民衆をしばしば愚民と慨嘆しながらも、民衆こそ自分にとっての教育対象として捉えていた。円了は妖怪の問題を日本文化の根底にあるものであり、民衆に恐怖心を与えて近代化を阻むものであると捉えていた。そのため、哲学から理学までの諸学を応用して、妖怪であるか否かを検証し、偽怪、誤怪を除き、仮怪の真相を合理的に説明し、真怪は不可知なものとした。円了の「妖怪学」は日本社会に大きな問題提起となり、円了は「妖怪博士」と呼ばれた。円了の目的は妖怪の俗信や迷信を民衆の生活から排除し、真の宗教と教育が民衆にまで広まる文化の根（土壌）を作ることにあった。円了の『妖怪学講義』は二〇〇〇頁余りの大著であるが、明治から大正、昭和の戦前から戦後、平成の時代までそれぞれ刊行される名著となっている。

第三に、明治二九年六月八日に、円了は「仏教哲学系統論」の学位論文により文学博士となった。円了はこの学位論文をそのまま出版しなかった。この論文を拡大する研究に取り組んだのである。そのことについて、愛弟子の高嶋米峰はつぎのように述べている[9]

九月十四日に上京して、十五日から、井上先生の宅で、仕事をすることになつた。仕事といふのは先生畢生の大著、『仏教哲学系統論』の第一巻、『外道哲学』著作の助手である。（『仏教哲学系統論』は、全十五巻となる予定であつたが、第一巻だけで、第二巻以下は、遂に発表せられなかつた）勿論、先生の仕事は、多岐多端に亘つて居て、学校の経営及び講義は勿論、幾種類かの講義録の編集発行、『東洋哲学』といふ雑誌の発行等等、その上に、地方巡講もしばしばあつて、僕の仕事も、相当忙しいものであつた。中でも、つらかつたと思ふのは、黄檗版一切経全部の、小口書をしたことであつた。

これによれば、円了の仏教哲学の研究は黄檗版一切経によって進められた。高嶋が小口書き、つまり一切経の下の小口に書物の題号や巻

次などを書き記すことを担当した。こうして、『仏教哲学系統論』の第一巻は印刷に回された。しかし、一二月一三日の哲学館の火災によって、一切経も校舎とともに焼失した。円了の計画はつぎのとおりであった[10]

第一編　外道哲学　　第二編　異部哲学
第三編　倶舎哲学　　第四編　成実哲学
第五編　律宗哲学　　第六編　唯識哲学
第七編　三論哲学　　第八編　起信哲学
第九編　天台哲学　　第一〇編　華厳哲学
第一一編　真言哲学　　第一二編　禅宗哲学
第一三編　浄土哲学　　第一四編　真宗哲学
第一五編　日宗哲学

円了も序文に記しているように、第一編の『外道哲学』のみが刊行され、火災からの哲学館の再建に、円了は尽力せざるを得なくなり、結局、仏教哲学系統論の体系は完成されることなく終わったのである。

円了は体系的思想を残さなかったと言われることがあるが、それには以上のような哲学館の災難があったことも想起されたい。その後の円了の著作をみると、単行本は明治三一年から明治三五年までで四九冊と多いが、倫理学関係の教科書、妖怪学関係の啓蒙書、小論をまとめた『円了随筆』『甫水論集』『円了漫録』『円了講話集』などで、学術関係では『破唯物論』の刊行に止まっている。

四　全国巡講時代

円了の全国巡講時代の始まりは、哲学館時代の末期と重なっている。明治三四年七月、第二次教育と宗教の論争が始まり、井上哲次郎の提起した倫理的宗教に対して、円了は「余が所謂宗教」を発表した。この論文は円了の宗教観が明確に示されている。倫理問題は、つぎの哲学館事件では主題であった。当時の論争は『哲学館事件と倫理問題』と題されて出版されている。当時の日本の倫理・道徳を定めたものは、明治二三年に公布された教育勅語である。第二回の世界旅行から帰国した円了は、イギリスでの調査をもとに「修身教会設立旨趣」を発表して、国民的倫理運動を提唱した。上は政府の大臣から、下は全国の町村長や小学校長まで、円了はこの趣意書を配付し、明治三七年二月に『修身教会雑誌』を創刊して、運動を開始した。このとき日露戦争が勃発し、愛弟子の高嶋米峰によれば、戦時下にあって、円了の修身教会運動は当初の期待したような爆発的な展開を見せなかったという。哲学館事件の問題処理から、円了は哲学館から引退し、明治三九年か

ら一教育者に戻り、修身教会の設立・拡張に取り組んだ（現在でいう社会教育、生涯学習の提起であった）。

円了の問題意識は、欧米の先進諸国と日本を比べると、国勢民力に大きな差があり、その差を生んでいる原因は、「我国民の道義徳行の彼に及ばざる所あるに由ると考ふるなり」[11]とし、西洋における日曜教会は民衆の倫理・道徳を学ぶ場であり、日本人の倫理の向上を目的に、寺院や学校を会場として社会人が修身を学ぶことが必要であるということにあった。円了の構想には円了が理想とする日本国家・社会の建設があったと考えられる。その理想を実現するための、修身教会運動ではなかったのだろうか。

ところで、国勢民力の向上を目的とするという円了の修身教会運動を考えると、筆者は社会学者のマックス・ヴェバーの提起した「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」（一九〇四、明治三七年）という論文を想起せざるを得ない。人々のキリスト教の信仰と労働を神が定めた職業、召命、天職、ベルーフと位置づけたものである。そのため、ヴェバーは、西洋近代の資本主義を発展させた原動力は、主としてカルヴィニズムにおける宗教倫理から産み出された世俗内禁欲と生活合理化であるとしたのである。勅語における忠孝を中心にして諸徳目の生活における実践を求めたのが、円了の修身教会運動の思想である。ヴェバーが見た職業倫理と、円了の修身教会は形が似ているが、思想内容に本質的違いがある。高嶋米峰が壮大な規模と構想でありながら、運動にならなかったと見ていた原因は、円了の場合、職業倫理という形で生活との結びつきが求められていなかったからではないだろうか。

すでに述べたように、円了は哲学館時代から全国巡講を経験していた。その経験を踏まえて、修身教会の結成を目的に、円了は明治三九年から運動に専従し、各地で講演活動を展開した。巡講日だけで、明治三九年は一七三日、明治四〇年は二七五日、明治四一年は二六二日、明治四二年は一八五日、明治四三年は二二六日、明治四四年は台湾巡講と第三回世界旅行のために七日のみ、大正元年は九二日、大正二年は二八四日、大正三年は二三二日、大正四年は一九七日、大正五年は二一四日、大正六年は二二一日、大正七年は朝鮮巡講のために一七二日、大正八年は八一日、国内の巡講の合計は二六二一日に達した。修身教会は大正の改元とともに国民道徳普及会と改称され、会長・会員は円了一人となり、組織運動ではなくなった。

このような膨大な日々において、円了は民衆に向かって何を語ったのであろうか。円了が残した統計（明治四二年～大正七年）によれば、詔勅修身は四一％、妖怪迷信は二四％、哲学宗教は一五％、教育は八％、実業は七％、雑題は五％となっている。詔勅修身が多いのは修身教会運動・国民道徳普及会から考えて当然であるが、それでも五〇％を超

えていない。講演のテーマは地元で選択できるシステムであったからか、詔勅修身が一席、その他が一席で講演は行われたというから、民衆の求めていたのは詔勅修身ばかりではなかったこと、あるいは詔勅修身の講演は熱烈に求められたものではなかったことが考えられる。[12] 逆に、妖怪迷信の講演は熱望されていたのであろう。哲学宗教よりも一〇ポイントほど多いのである。一三年間にわたる円了の全国巡講は当初の目的に則して一貫して行われたのか、あるいはどの時期から変化したのか、それを判別する新聞記事がないので不明である。時代が明治から大正に変化していたのであるから、民衆の側の意識も変化して、円了はそれに対応したのではないかとも考えられる。今後の研究課題である。

円了はこの全国巡講時代に、第三回の世界旅行を行っている。オーストラリア、アフリカの一部、南米、それに南極と北極を望む最先端の岬などを周遊した。これによって、第一回から第三回の世界旅行で、五大陸と二つの極点を経験し、円了の目的であった地球の周遊の世界旅行は完結している。

全国巡講の開始から一年後、円了は哲学堂の拡張に取り組んでいる。すでに明治三七年には哲学館大学の認可記念として四聖堂は建立されていた。哲学館の引退のとき、移転候補地として取得した現在の東京都都中野区松が丘の土地は、円了が個人で買い戻すことにしていた。円了は一年間の修身教会運動を経て、この土地を精神修養的公園にすることに決定し、六賢台、三学亭など主たる建物と、唯物園、唯心池など庭園の整備を進めた。そのため、巡講では、午前は移動、午後は講演、夜は揮毫を積極的に行い、揮毫料の半額を費やして、公園の建設費に充当した。哲学堂七七場は、すべて哲学に関する名称を付けたものである。そのため、地図では井上哲学堂という名称で呼ばれていた。大正四年に図書館（絶対城）が完成し、ほぼ現在の形状になったと言われ、図書館の落成披露会を開催して、少しずつ一般に公開されるようになった。

すでに述べたが、円了は大正八年六月六日に、巡講先の中国・大連で、講演中に倒れたまま死去した。日本の近代化の先駆者であった円了の生涯は六一歳で終わった。遺言により、哲学堂は財団法人となった。東洋大学も財団法人であったから、円了は子孫に二つの事業を世襲させなかった。子孫に美田を残さずの主義であったからである。円了は生涯、官途に就かず、在野で生きた人物である。ある人は「円了の前に円了なし、円了の後に円了なし」という。円了は独自の生涯を生き抜いた事業家であり、思想家であった。

晩年の全国巡講時代の思想について、述べておこう。

第一に、宗教について、円了は「余が所謂宗教」を発表している。この論文は、井上哲次郎の倫理的宗教への反論であるが、円了の宗教

観がよくまとまっている。円了は哲次郎の「倫理の成分を捕らえきたりて宗教の第一原理とすること」に対し、宗教も倫理を一要素とするが、宗教は必ずしも倫理だけではない、倫理は宗教の目的を達する一方便であると、円了は述べている。円了がいう宗教とは、人心の根底より流出するものであり、人性自然の発達上内部より開展するものであるという。また、学術と宗教は相対するもの、相反するものであり、学術は有限可知的であり、宗教は無限不可知的であるともいう。余がいわゆる宗教は、「思想の反面たる絶対不可知的の門内に本領を定め、人をしてこの境界に超入直達し、もって妙楽の心地に安住せしむるもの」[13]をいうと述べている。

円了は哲次郎の「諸宗教を一括して総合的新宗教を構成すること」に対し、結論としては「従来の宗教を改良発達を加えて今後の学術と併行し、時勢に適応せしむるに至らば、新たに宗教を開立する必要を見ざる」[14]、また学術上の道理は社会の少数者は理解できるが、多数のものは理解できず、宗教上の道理は多数の人がこれに帰向するもので、学術研究の視点から諸宗教の契合点を看破して、これを抽出総合して造る宗教はあまりに無味無色で人心と結合しないものであると述べている。哲次郎がとくに問題とする厭世については、「外面に厭世を示して内実非厭世なることは、大乗仏教の特色にして、かつその長所なり」[15]と強調している。

円了は哲次郎の「人格的実在を宗教の組織中より全然除去すること」に対し、宗教は道理のほかに情感の元素を加味することを要するもので、学術は理論なり、宗教は応用なり、学術は真理に達するを目的とし、宗教は安楽に住することを目的とするので、宗教に情感を加えることは必要であるという。また「古来、人格的を立てざる宗教が世に広まるに従い、自然に人格的を設くるに至りたる一例を見ても、宗教にその必要あること明らかなり」として、円了は真っ向から反対している。円了は『真理金針』で知力の宗教と情感の宗教に分類して宗教を論じているが、宗教が情感的であることを否定しているわけではないのである。

第二に、哲学については、円了は明治四二年に『哲学新案』を刊行して、この世界が相含の論理で存在していることを明らかにした。円了の現象即実在論の完成型である。詳細は第四章第三節で明らかにしたので、ここでは繰り返さない。

第三に、円了が回心を経験したことである。これは『哲学新案』の第一七章第一〇四節の「歓天楽地」で述べている。「人をして歓天楽地の間に、手の舞い足の踏むを知らざらしむ。これ空想にあらずして事実なり、実験の結果なり、他人の実験にあらずして自心の実験なり。何人も他人の力を待たず、自己の心門を開きて、この状態を実験し得べし。もしこれを疑うのがあらば、自心において実験するにしかず。

／……楽天の真味は信性を待つにあらざれば決して知るべからず、宗教の楽天実にここにあり。しかるに宗教上厭世を説くことあるは、迷前の状態をいうのみ。もし悟後に至らば、厭世全く地を払い、泰然として歓天楽地の間に逍遥し得るは必然なり。世間もし煩悶厭世を病むものあらば、請う自心の上にこれを試みよ。」[16]と、自心の実験なりと強調している。円了の信仰論はここでは十分に展開されていないのが、惜しまれる。

第四に、円了は向上門と向下門を強調していることである。哲学において、円了は向上とともに向下について、つぎのように述べている。[17]

哲学は物心相対の境遇より絶対の真際に論到する学とするは、哲学の向上門である。この向上門の外に更に絶対の域より相対界へ論下する一道があるが、これを仮に向下門と名付けておく。すなわち哲学の応用の方面である。もとより宗教にも向下門あれど、哲学とややその趣を異にしている。もし哲学に向上のみありて向下なきときは、ただ学者が己の知欲を満たすまでの学となり、世道人心の上になんら益するところなきに至り、畢竟無用の長物たるを免れぬ。よって哲学には必ず向上向下の二門を併置しておかねばならぬ。すなわち向上門は哲学の理論に属する方面にして、向下門は実際に属する方面である。故にこれを理論門、実際門と称してもよい。

また、向下の目的について、つぎのように具体的に述べている。[18]

向下は人生を目的とするものである。故に向上門が宇宙絶対の学ならば、向下門は人類社会の学である。向上門が絶対を考定する学ならば、向下門は人生を改善する学である。ひとたび絶対を究明して得たる結果を人生に応用して、社会も国家も個人と共に向上発展せしめんとするは、向下門の期するところである。この点につきては倫理宗教に密接の関係あることになる。

この向上と向下は、哲学と宗教に関係するものであり、その点について円了は、つぎのように述べている。[19]

余の活哲学は向下に重きを置くから、その定義は理論を向上せしむるにあらずして、実際上人生を向上せしむるの学とし、実行上人生を進めて絶対に近づかしめんとする目的である。この点において宗教と相合するに至る。余はかつてより哲学の直接の応用は、道徳と宗教、なかんずく宗教なりとの説を唱えきたった。ただし普通の宗教と哲学の宗教とはその性質を異にしている。普通

の宗教は初めより道理を用いず、信仰一方であるが、哲学の宗教は道理を究め尽くしてのち信念を起こす方である。このことも前にすでに一言しておいた。もしその例を挙ぐればヤソ教は信念一方によるものなるが、仏教は道理と信仰とを併置し、道理上より信仰を組み立つるものなれば、余は仏教を呼んで哲学的宗教と名付けておいた。

円了の向上門と向下門の思想は、理想として考えられるが、一般的思想として通用するものであるのか、今後の研究課題としたい。

第四に、円了と教育勅語の関係である。円了は修身教会運動・国民道徳普及会を行っていても、官という権力と距離をとっていた。円了の有名な狂歌に「官々となる金石の声よりも民々と呼ふ蝉そこひしき」と、官よりも民を重視する思想であった。また「学者が肥ゆれば御国がやせる、サーベルが光れば鍬鎌さびる、官吏がヌクけりゃ、民家が寒い、これでは国が立ちゆかぬ」と、学者、軍人、官僚を批判している。このような思想を持って、全国巡講を行ったのであるが、教育勅語をどのように位置付けていたのか、そのことは研究者によって位置づけが分かれている。宗教社会学者の高木宏夫はつぎのように述べている。[20]

井上円了に対する最も単純な戦後におけるレッテルは「ナショナリスト」ということであるが、この視点でみれば、右の年代以前つまり東京大学予備門入学以前は、ナショナリズムの思想形成期であり、鹿鳴館時代はその理論的表現期、日清戦争前後は教育勅語の思想との調和をはかる時期であり、日露戦争前後は普遍的思想との関係における疑問の時代であり、晩年はナショナリズムからの脱却期と言うことができよう。

修身教会運動と哲学堂については、稿を改めて論じたいが、教会設立の主旨をみると、教育勅語による修身を基礎に置いた地方教育であるが、明治三九年の退隠を境に、この路線は雑誌からなくなって行き、ほとんどがいわゆる精神修養的素材による話に変わってしまっている。日露戦争の終局に対応しているのである。その原因がどこにあるかは現在のところ明らかではない。

一方、仏教学者の田村晃祐は、別の見方で、つぎのように述べている。[21]

哲学館事件のころより、円了の社会的活動は宗教的立場から世俗的立場へ、仏教から道徳へ、そして明治政府の思想に沿う立場へ、戦争賛美の立場へと、重点が変わっていったように見受けら

れます。次節で紹介するように、『仏教活論序論』で説く、愛理（真理を愛すること）にもとづく近代的・合理的国家建設の理想から、現実的国家体制への追従の立場へと変わっていったのではないかと思われます。

このように、高木と田村における円了の全国巡講時代の思想の見方は正反対である。修身教会運動・国民道徳普及会の活動において、円了がどのような思想を民衆に語りかけたのか、その資料がない現状では正確な評価ができないので、今後の課題としておきたい。

【註】

（1）東京大学で予備門から同級生であった北条時敬は、円了に関してつぎのよう述べている（北条時敬「学生時代の井上君」『井上円了先生』東洋大学校友会、大正八年、三二六頁）。

私の想像し観察するところは、君が後年哲学館を起し、或は地方講演を事とした事実は、其の学生時代に種々の会を起して之れに出席した事と一致符合せる様に思はれる。

然るに当年斯くの如く交際の広かつたにも拘らず、比較的当時親友なる者は少なかつた様であつた、親友と言ふよりも寧ろ益友は多くなかつたと思ふ。是蓋し、井上君が当時業に既に一派を造り成し、早くも一家の見を備へて居て、傲然たる気風容易に他の容喙を許さなかつた為、自然益友の乏しかつたのであるまいか。是れ一面君が長所を意味し又一面其の短所を意味するものと言ふべきである。

北条が円了から感じ取ったものは、既成仏教教団の住職の体質であったと考えられる。一般的に住職には建前と本音の表裏があると言われている。宗教社会学者の高木宏夫は、真宗大谷派の住職の意識調査を行っている。この調査では、住職の意識を「関心とその度数」で分析している。高木は住職の関心を五つの類型とした。組織活動、教学内面化、御崇教、習慣護持、寺院経営の五つの側面から関心度指数を分析した結果、現実にはこれらの組み合わせと指数の高低で、住職の意識が構成されていることが判明したと述べている（高木宏夫「訓覇総長と同朋会運動」『訓覇信雄論集』法蔵館、平成一三年、一九一―一九三頁）。

（2）高橋家の江戸時代からの文書は、現在、東洋大学井上円了記念博物館に寄贈されている。高橋家に関する研究は、白川部達夫（東洋大学文学部教授）を代表者として「近世・近代の地域社会と名望家」のテーマで取り組まれ、平成二四年度、平成二五年度、平成二六年度にわたり三冊の報告書が刊行されているので参照されたい（その中に、拙編「井上円了と高橋家」、拙編「井上円了と高橋九郎」、拙稿「高橋九郎と創立者井上円了」が掲載されている）。また、高橋九郎、木村鈍叟、石黒忠悳、井上円了の四者の関係については、松本剣志郎「鈍叟・況翁・円了―越後長岡の名

望家高橋九郎を交点に」（『井上円了センター年報』第二三号、平成二六年）が詳しいので参照されたい。高橋九郎は、円了が大学卒業後に始めた、出版事業の哲学書院の設立、教育事業の私立学校・哲学館の創立を支援している（「高橋家書簡」『井上円了研究』第七号、平成九年を参照）。とくに哲学館への創立寄附金は三度にわたり合計三〇〇円で、高額寄付者の三番目であった。一時、円了と檀家総代の高橋九郎は、慈光寺の住職継承をめぐって対立した（『百年史　資料編Ⅰ・上』、五〇―五三頁）が、その後、関係は修復され、ともに慈光寺の法人化に取り組んでいる（高木宏夫「旧民法における宗教法の問題点―（一）慈光寺と井上円了の場合」（『井上円了センター年報』第五号、平成八年を参照されたい）。

（3）『漢詩集』、一三三頁。

（4）中野目徹『書生と官員―明治思想史点景』汲古書院、平成一四年を参照。

（5）田村晃祐『近代日本の仏教者たち』日本放送出版協会、平成一七年、七八頁。

（6）吉田久一の近代仏教史における円了論については、同氏の『日本近代仏教史研究』吉川弘文館、昭和三四年を資料として、円了論の問題点を明らかにした。さらに、同氏はそれから一〇年後の昭和四四年に刊行された『明治文学全集　八七　明治宗教文学集（一）』筑摩書房の中で、「明治の仏教思想」の論文を発表し、そこで円了を取り上げ、さらに同書に円了の『真理金針　初編』を収録しているので、「解説」で「井上円了」に言及している。吉田の「円了は一八八五年（明一八）帝国大学文科大学哲学科を卒業し」（三九三頁）は誤りであり、正しくは東京大学文学部哲学科の卒業である。吉田の「『仏教活論』は画期的な名著といわれ、第一編「序論」、第二編「破邪活論」、第三編「顕正活論」、第四編「護法活論」の四編から成立している」（三九三頁）は、第一編から第三編まで正しいが、第四編の「護法活論」は大正元年に『活仏教』のタイトルで出版されており、円了の認識では時代の変化に合わせて執筆したと述べているから、「四編から成立している」という記述は正しくない。吉田の「円了は仏教の哲学的基礎づけに尽力し、明治仏教を蘇生させる原動力の一つとなったが、その特色は街頭哲学者、あるいは仏教啓蒙思想家であって、余り仏教信仰の形成者という側面はみえない」（三九三頁）という規定には問題があろう。「その特色は街頭哲学者、あるいは仏教啓蒙思想家」というのは、「仏教信仰の形成者」ではないことを強調するために記述したことであろうが、歴史学者がここまで断定するのはいかがであろうか。吉田は「円了が近代仏教教学の形成上哲学的基盤を提供したことであり、他の一つは仏教革新運動の展開を促したことである。仏教学の体系化を受け継いだのは村上専精であり、その代表的な著作は『仏教統一論』となって明治三四年（一九〇一）に第一巻が刊行された。しかし専精の著書の中には、哲学及び科学の論理のみによって仏教を説明し、そこからキリスト教の非倫理性を批判することが不適当であると述べて、円了の立場に対する批判も含まれていた。このような批判は現代の学界においても円了に対する評価と適合するものであり、その点に円了の啓蒙思想の限界が存したのである。……大道長

安は……円了の思想に欠けていたとみなされる仏教の宗教性や信仰性の獲得に努めた。円了の思想は『真理金針』をあらわした明治二十年代よりさらに顕著な進展が認められないが、……近代信仰の確立は、円了の宗教と哲学との一体化の主知主義的な立場からは期待し得なかったのである」（四〇三頁）という。村上専精が円了の仏教学の体系化を受け継いだという吉田の説は、同じ近代仏教史の池田英俊の『明治の新仏教運動』（吉川弘文館、昭和五一年）では言及されていないし、仏教学者の田村晃祐も『近代日本の仏教者たち』（前掲書）でそのように位置付けていない。当の村上にも、円了にもそういう認識はなかったであろう。吉田の誤りである。

円了は専精の『仏教統一論』をつぎのように批判している（井上円了「余がいわゆる宗教」（『甫水論集』明治三五年、『選集』第二五巻、四八―四九頁）。「近日、村上博士『仏教統一論』を著し、仏教の本意は普遍的涅槃にありて、擬人的弥陀にあらざることを説き、浄土門の本尊様がまさに抹殺せられんとする場合となり、真宗門内これがために逆浪空を巻き、天に朝せんとするありさまなりという。余聞く、博士は春秋すでに五十に満ち、ようやく初老の境に遊ばんとす。しかしてその勇かくのごとし。実に壮者をしのぐというべし。余、一句の謎を案じてこれを得たり。／村上博士の『仏教統一論』とかけてなんと解く、「慶応義塾と解く、そのこころは三田（弥陀）を圧倒す。」しかれども博士の論は、学術と宗教とを同一視せらるる巽軒博士の論に感染せられたることなきやの疑いあり。余おもえらく、仏教の長所は法、報、応の三身を立つるにあり。法身の涅槃のみにては学術として価値あるも、宗教としてはさらに効力なきものとなるべし。」）吉田の説については、すでに述べたので繰り返さないが、吉田は近代仏教史の開拓者であったけれども、他の研究者が少ないということもあって、吉田の説は十分に検証されていないのではないだろうか。

（7）吉田久一は「とくに一八八七年（明二〇）九月「護国愛理」をモットーに哲学館（後の東洋大学）を開き、仏・儒・神など東洋学を教育した」（同右、三九三頁）と、円了の哲学館の教育について述べている。しかし、哲学館の教育の基本は哲学教育であり、その中で仏教や儒教は教育されたが、神道は教育科目に入っていない。吉田の誤りである。

（8）田村晃祐「解説」（『選集』第六巻、四一一頁）。

（9）高嶋米峰『高嶋米峰自叙伝』学風書房、昭和二五年、六二―六三頁。

（10）井上円了『外道哲学』（『選集』第二二巻、一六頁）。

（11）井上円了「修身教会設立旨趣」（『百年史　資料編Ⅰ・上巻』、二一頁）。

（12）教育勅語の国民への徹底は井上哲次郎が目的としたところでもあったが、国民生活への定着には問題があったことは、第二次教育と宗教の論争からでもわかる。昭和の時代に入ると、教育勅語の改訂が公然と論議されるようになる。これについては、久木幸男「教育勅語四〇周年」（『横浜国立大学教育紀要』第一九集、昭和五四年、一―一九頁）を参照されたい。

（13）井上円了「余がいわゆる宗教」（『甫水論集』明治三五年、『選集』第二五巻、三八頁）。

（14）同右、四四頁。

(15) 同右、四三頁。

(16) 井上円了『哲学新案』明治四二年（『選集』第一巻、三七八―三七九頁）。

(17) 井上円了『奮闘哲学』大正六年（『選集』第二巻、二三一頁）。

(18) 同右、二三三―二三四頁。

(19) 同右、四一七―四一八頁。

(20) 高木宏夫「井上円了の宗教思想」（高木宏夫『井上円了の世界』東洋大学井上円了記念学術センター、平成一七年、八一頁、一〇三頁）。

(21) 田村晃祐『近代日本の仏教者たち』、前掲書、八四―八五頁。